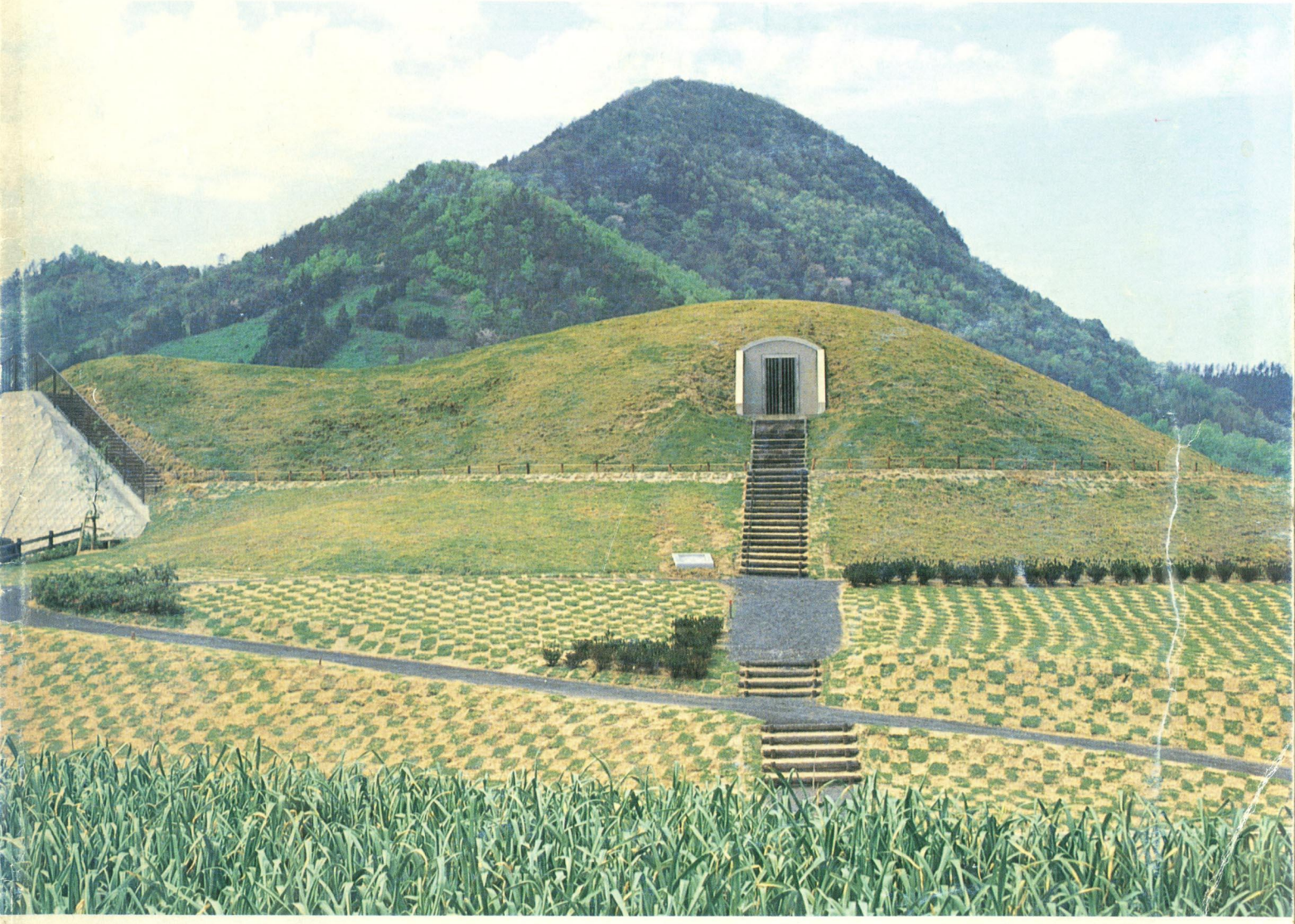
史跡 有岡古墳群（王墓山古墳）

保存整備事業報告書



1992

善通寺市教育委員会

史跡 有岡古墳群（王墓山古墳）

保存整備事業報告書

1992

善通寺市教育委員会

序

善通寺市有岡地区には、古墳時代全時期にわたり築かれた数多くの古墳が確認されており、その中央部に位置する独立丘陵上には、「王墓山古墳」と呼ばれる古墳が所在しております。

昭和57年に、この独立丘陵に対する宅地開発申請がなされ、緊急発掘調査が行われ、王墓山古墳は県下には例の無い、古い形式の横穴式石室を主体部とする前方後円墳であり、玄室内部には石屋形が設置されていることが判明しました。

横穴式石室は部分的に崩壊しておりましたが、厚い一枚の板石で閉塞された玄室からは、金銅製の冠帽や馬具、煌びやかな装身具、武具など、我が国でも有数の副葬品が出土し、その名にふさわしい王の墓であることが確認されたのです。

王墓山古墳は、善通寺市周辺部の古代史のみならず、大和政権と地方豪族の関係・大陸との繋がりを考える上で、極めて貴重な文化財であることが高く評価され、昭和59年に「史跡指定」を経て公有地化されました。

こうして、宅地開発から守られた王墓山古墳を、文化財として長く保存し、本市にふさわしい文化施設として活用するための保存整備事業が望まれました。

保存整備事業は国からの補助を得て、文化庁・奈良国立文化財研究所・香川県教育委員会等の指導を受け、昭和61年度から実施されましたが、王墓山古墳のような特殊な構造の古墳の報告例は無く、工事の設計や実施には大変苦慮いたしました。

そして、王墓山古墳は昭和57年度の緊急発掘調査から９年もの年を経て、保存整備工事が竣工し、築造当時の偉容を取り戻すことができました。

このたびの整備報告書刊行にあたり、ご指導をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査に携われた調査関係者、及び工事関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成４年３月31日

善通寺市教育委員会

教育長　　勝　田　英　樹

第１図　発掘された横穴式石室（東から）～昭和57年度の発掘調査～

第２図　遺物出土状況（須恵器）～昭和57年度の発掘調査～

第３図　遺物出土状況（武具・馬具）～昭和57年度の発掘調査～

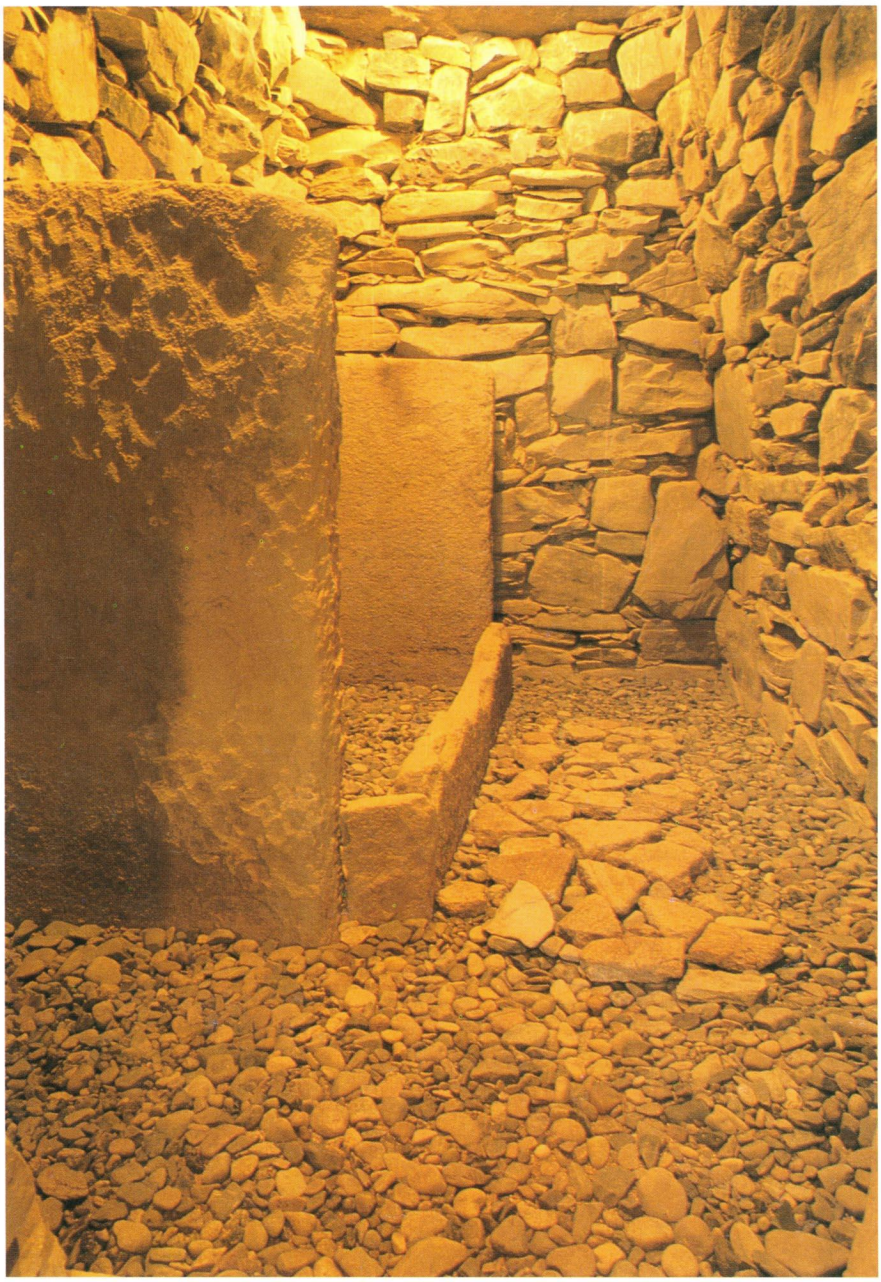
第４図　墳丘東側斜面で検出された弥生時代の集団墓（東から）

第５図　横穴式石室周辺部の版築土層（羨道部西側壁面）

※土壌改良された地山層表面に、まず第一次墳丘が構築されている。横穴式石室は第一次墳丘上に設けられた掘方内に構築され、石積みと並行した裏込め作業の完了と併せて、第一次墳丘と石室天井部を覆うように第二次墳丘が盛られているようである。暗黒色の改良土壌は第二次墳丘に顕著であり、開口部付近では羨道部の両側から土留を目的としたとみられる石列が墳丘内部に廻っている。

第６図　横穴式石室掘方内の防水層（灰色粘土と褐色土の互層）

第７図　横穴式石室解体復元作業風景（羨道部）



第８図　整備後の横穴式石室（羨道部から玄室を望む）

※石屋形天井石復元架設前の状況

第９図　墳丘の復元作業風景（南から）

第10図　整備後の墳丘（上段：南から）・（下段：北から）

例　　言

1．本書は、善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存修理事業の報告書である。

2．王墓山古墳は善通寺市善通寺町字大池東1785番地－1の小丘上に所在する。

3．史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存修理事業は、昭和61年度から平成3年度までの6カ年間継続して実施された。

4．本事業の組織は本文中（97頁）に別記した。

5．本書の編集作成は善通寺市教育委員会文化振興室主事笹川龍一が行い、下記の頁に関しては奈良国立文化財研究所の先生方に玉稿を賜わった。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

町田　章（奈良国立文化財研究所・平城宮跡発掘調査部長）…… 90頁

内田昭人（奈良国立文化財研究所・埋蔵文化財センター保存工学研究室・主任研究官）……153頁

6．昭和57年度の発掘調査で王墓山古墳主体部から出土した金属器類は、奈良国立文化財研究所の御好意で復元・保存処理を実施して頂き、更に内容を本報告書に掲載するにあたり奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの多大なご協力を頂いた。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

7．補助事業の中で実施された、墳丘及び墳丘東側緩斜面の発掘調査、横穴式石室解体復元工事の際の調査・実測、本書に掲載した遺物の実測は四国学院大学考古学研究会の協力を得て笹川が行った。

8．本事業及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

町田　章・沢田正昭・内田昭人・村上　隆・花谷　浩（奈良国立文化財研究所）、吉田重幸・丹羽佑一（香川大学）、田中哲雄、小林謙一、松本豊胤、松浦　修、今尾一枝、香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、空間文化開発機構、太田文雄、四国学院大学考古学研究会、天羽利夫（徳島県立博物館）

9．王墓山古墳は昭和57年11月15日から昭和58年3月31日まで発掘調査が実施され、調査概報が刊行されているので参考にして頂きたい。なお、王墓山古墳から出土した遺物の一部は、現在も保存処理や分析・整理作業が行われており、善通寺市教育委員会では、この作業の完了を待って正式な報告書を刊行する予定である。

目　　次

序（1頁）・カラーグラビア（3～21頁）・例 言（23頁）・目 次（24～27頁）

第一章　遺跡周辺の地理と歴史 …… 28

第二章　主体部の発掘調査 …… 34
① 調査に至る過程 …… 34
② 緊急発掘調査の実施 …… 35
③ 横穴式石室と石屋形の発見 …… 36
④ 石室の構造 …… 40
⑤ 副葬品の出土状況 …… 43
⑥ 出土遺物について …… 46
Ⅰ 須恵器 …… 48
Ⅱ 土師器 …… 65
Ⅲ 馬　具 …… 66
Ⅳ 武具（器） …… 74
Ⅴ 装身具 …… 78
Ⅵ 工　具 …… 86
Ⅶ 埴　輪 …… 88

第三章　王墓山古墳の文化財的価値 …… 90

第四章　遺跡の保存整備事業 …… 92
① 保存整備事業に至る過程 …… 92
② 昭和61年度事業 …… 94
③ 昭和62年度事業 …… 97
④ 昭和63年度事業 …… 113
⑤ 平成元年度事業（横穴式石室解体復元工事） …… 118
⑥ 平成2年度事業（墳丘復元工事） …… 137
⑦ 平成3年度事業 …… 142
⑧ 善通寺市単独の周辺整備事業 …… 152

第五章　王墓山古墳整備事業の評価 …… 153

第六章　ま　と　め …… 154

図 版 目 次

表表紙　史跡有岡古墳群(王墓山古墳)整備後全景～南から～
裏表紙　史跡有岡古墳群(王墓山古墳)整備後全景～北から～

カラーグラビア
第１図　発掘された横穴式石室(東から)～昭和57年度の発掘調査～ …… 3
第２図　遺物出土状況(須恵器)～昭和57年度の発掘調査～ …… 5
第３図　遺物出土状況(武具・馬具)～昭和57年度の発掘調査～ …… 7
第４図　墳丘東側斜面で検出された弥生時代の集団墓(東から) …… 9
第５図　横穴式石室周辺部の版築土層(羨道部西側壁面) …… 11
第６図　横穴式石室掘方内の防水層(灰色粘土と褐色土の互層) …… 13
第７図　横穴式石室解体復元作業風景(羨道部) …… 15
第８図　整備後の横穴式石室(羨道部から玄室を望む) …… 17
第９図　墳丘の復元作業風景(南から) …… 19
第10図　整備後の墳丘(上段：南から)(下段：北から) …… 21

挿　図
第11図　善通寺市遠景 …… 28
第12図　王墓山古墳と周辺の主要遺跡位置図 …… 31
第13図　有岡古墳群全景 …… 33
第14図　王墓山古墳遠景(大正時代)「史蹟名勝天然記念物調査報告」から …… 34
第15図　王墓山古墳実測図(大正時代)「史蹟名勝天然記念物調査報告」から …… 34
第16図　王墓山古墳遠景(昭和57年) …… 35
第17図　王墓山古墳墳丘実測図(昭和57年度「調査概報」から) …… 37
第18図　横穴式石室上面検出状況実測図(昭和57年度「調査概報」から) …… 38
第19図　発掘調査前の墳丘(後円部から前方部を望む) …… 39
第20図　横穴式石室の上面検出状況(西から) …… 39
第21図　横穴式石室完掘状況(東から) …… 39
第22図　横穴式石室実測図(昭和57年度「調査概報」から) …… 41
第23図　石屋形と転落した石屋形の天井石(西上方から) …… 42
第24図　転落した石屋形天井石上の遺物出土状況(南から) …… 42
第25図　石屋形内部の遺物出土状況(西上方から) …… 42
第26図　石屋形天井石崩落の状況 …… 45
第27図　横穴式石室内の遺物出土状況実測図(昭和57年度「調査概報」から) …… 45
第28図　玄室北東隅部の遺物出土状況(西から) …… 46
第29図　王墓山古墳出土遺物一覧表 …… 47
第30図　玄室南西隅部の須恵器出土状況(東から) …… 48
第31図～第56図　出土遺物及び写真(須恵器) …… 48～64
第57図　出土遺物(土師器) …… 65
第58図～第68図　出土遺物(馬　具) …… 66～73
第69図～第76図　出土遺物(武　具(器)) …… 74～78
第77図～第90図　出土遺物(装身具) …… 79～86
第91図～第92図　出土遺物(工　具) …… 87

第 93 図～第 94 図　出土遺物（埴　輪） …… 88･89
第 95 図　王墓山古墳出土遺物集合写真 …… 91
第 96 図　整備事業着手前の史跡全景 …… 93
第 97 図　横穴式石室の保存整備事業案① …… 94
第 98 図　史跡及び周辺実測図 …… 95
第 99 図　土留擁壁工事実施前の状況～史跡北側裾部～ …… 96
第100図　土留擁壁工事作業風景 …… 96
第101図　土留擁壁工事及び境界柵工事竣工状況 …… 96
第102図　調査整備委員会開催風景 …… 97
第103図　横穴式石室の保存整備事業案② …… 98･99
第104図　南東側上空から見た史跡全景 …… 100
第105図　調査区設置状況 …… 101
第106図　墳丘北東側平坦部確認調査前の状況 …… 102
第107図　墳丘北東側平坦部遺構検出状況 …… 102
第108図　弥生時代の集団墓遺構検出状況実測図 …… 103
第109図　墳丘北東側平坦部で検出された遺構群 …… 104･105
第110図　後円部北東側調査区遺構検出状況 …… 106
第111図　後円部の版築土層 …… 106
第112図　後円部東側［前庭部］調査風景 …… 107
第113図　後円部東側［前庭部］調査風景 …… 107
第114図　後円部東側［前庭部］完掘状況 …… 108
第115図　後円部東側［前庭部］完掘状況 …… 108
第116図　南側くびれ部墳裾検出状況 …… 109
第117図　北側くびれ部墳裾検出状況 …… 109
第118図　前方部北側コーナー墳裾検出状況 …… 110
第119図　前方部擁壁構造図 …… 111
第120図　前方部擁壁工事実施前の状況 …… 112
第121図　前方部擁壁工事実施作業風景 …… 112
第122図　前方部擁壁工事竣工状況 …… 112
第123図　史跡整備完成予想図 …… 115
第124図　実施設計平面図 …… 116
第125図　基礎地盤調査風景及び調査結果 …… 117
第126図　横穴式石室（羨道）解体復元工事直前の状況 …… 118
第127図　横穴式石室（玄室）解体復元工事直前の状況 …… 118
第128図　玄室東壁の変形の状況 …… 119
第129図　横穴式石室（羨道部）解体作業風景 …… 119
第130図　玄門部における閉塞石下部の状況 …… 120
第131図　玄室及び石屋形解体作業風景 …… 120
第132図　玄室部分解体作業完了の状況 …… 121
第133図　玄室床面（礫床）剝取り作業風景 …… 121
第134図　石屋形含浸処理作業風景 …… 123
第135図　石屋形奥壁側腰板接合状況 …… 123
第136図　石屋形奥壁側腰板保存処理作業完了の状況 …… 123

第137図　石屋形天井石とレプリカ架設状況 …… 124
第138図　羨道部下層石積と小トレンチ設置状況 …… 124
第139図　羨道部人工基盤構造図 …… 125
第140図　羨道部人工基盤構築状況 …… 126
第141図　不足石材採取作業風景 …… 126
第142図　玄室西壁（復元前の状況） …… 127
第143図　玄室西壁（復元後の状況） …… 127
第144図　玄室東壁（下層復元前の状況） …… 128
第145図　玄室東壁（下層検出状況） …… 128
第146図　玄室東壁（下層復元後の状況） …… 128
第147図　玄室東壁（外側の防水処理作業風景） …… 129
第148図　玄室（復元状況） …… 129
第149図　玄室復元前・後実測図① …… 130
第150図　玄室復元前・後実測図② …… 131
第151図　横穴式石室復元作業資料 …… 132
第152図　羨道部の復元作業風景 …… 133
第153図　羨道部の天井石架設作業風景 …… 133
第154図　復元をほぼ完了した羨道部 …… 133
第155図　復元後の横穴式石室実測図 …… 135・136
第156図　玄室部の天井石架設作業風景 …… 137
第157図　玄室部の天井石架設作業完了状況 …… 137
第158図　復元が完了した石室上部の盛土 …… 137
第159図　玄室床面の復元作業状況 …… 138
第160図　玄室床面の復元作業完了の状況 …… 138
第161図　墳丘復元図（断面） …… 139
第162図　墳丘復元図（平面） …… 140
第163図　保存整備作業着手前の王墓山古墳全景 …… 140
第164図　平成元年度事業完了後の王墓山古墳全景 …… 141
第165図　平成２年度事業作業中の王墓山古墳全景 …… 141
第166図　平成２年度事業完了後の王墓山古墳全景 …… 141
第167図　後円部北側急斜面の土留柵設置状況 …… 142
第168図　後円部北側急斜面の盛土完了の状況 …… 142
第169図　弥生時代の竪穴式石室復元模型 …… 143
第170図　弥生時代の箱式石棺 …… 143
第171図　周辺整備作業風景（園路簡易舗装工事） …… 144
第172図　周辺整備作業風景（前方部擁壁階段工事） …… 144
第173図　園路及び植栽内容 …… 145
第174図　周辺整備作業風景（植栽工事） …… 145
第175図　平成３年度事業着手前の状況（南から） …… 146
第176図　平成３年度事業完了の状況（南から） …… 146
第177図　平成３年度事業着手前の状況（北東から） …… 147
第178図　平成３年度事業完了の状況（北東から） …… 147
第179図～第184図　史跡内施設詳細図 …… 148～153

第一章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70～80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には稀に縄文土器片が包合されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ケ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

第11図　善通寺市遠景

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第１様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は２～３㎞を計るが、当時の復元海岸線が現在の標高５ｍあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られていた。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居跡・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居跡からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居跡や小児壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。

九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

ここから北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみるといずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉾1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器

1．中ノ池遺跡
2．五条遺跡
3．三井遺跡
4．甲山北遺跡
5．旧練兵場遺跡群
①彼ノ宗遺跡
②仙遊遺跡
③善通寺西遺跡
④仲村廃寺(白鳳)
⑤善通寺伽藍(奈良)
6．九頭神遺跡
7．石川遺跡
8．稲木遺跡
9．青龍古墳
10．大塚池古墳
11．下吉田神社古墳
12．北原古墳
13．菊塚古墳
14．王墓山古墳
15．丸山古墳
16．鶴ガ峰2号墳(消滅)
17．鶴ガ峰4号墳
18．鶴ガ峰山頂古墳
19．磨臼山古墳
20．生野鑵子塚(消滅)
21．御館神社古墳
22．宮ガ尾古墳
23．瓦谷古墳
24．岡古墳群
25．野田院古墳
26．丸山1・2号墳
27．大麻山椀貸塚
28．大麻山経塚
29．土やぐら古墳
30．熊ノ巣古墳
31．陣山古墳群
32．青ノ山古墳群
33．吉岡神社古墳
34．宝幢寺跡(白鳳)

凡　例　　(主要な遺跡のみを掲載した)

：銅鐸出土地　：銅剣出土地　：銅矛出土地　：祭祀遺跡　●：円墳　■：方墳　：前方後円墳

第12図　王墓山古墳と周辺の主要遺跡位置図

が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

古墳時代に入ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山１号・２号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山２号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方部盛り土後円部積石墳である。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鑵子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴ガ峰２号墳（消滅）・鶴ガ峰４号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計８基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の人々の生活の場は、後期を中心とした弥生時代の集落域と重複しており、旧練兵場遺跡をはじめ、善通寺市街地から北に広がる水田地帯で数多くの集落遺跡が確認されており、有岡地区を中心に各地に立派な古墳群を残した集団と各集落との関係が注目されている。

古墳時代になると弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が独自の技術により灌漑治水事業等を行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者として生まれ変わり、この様に数多くの古墳を築いたが、この権力者（豪族）層は奈良時代には貴族層に変る。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓とする考えが有力である。

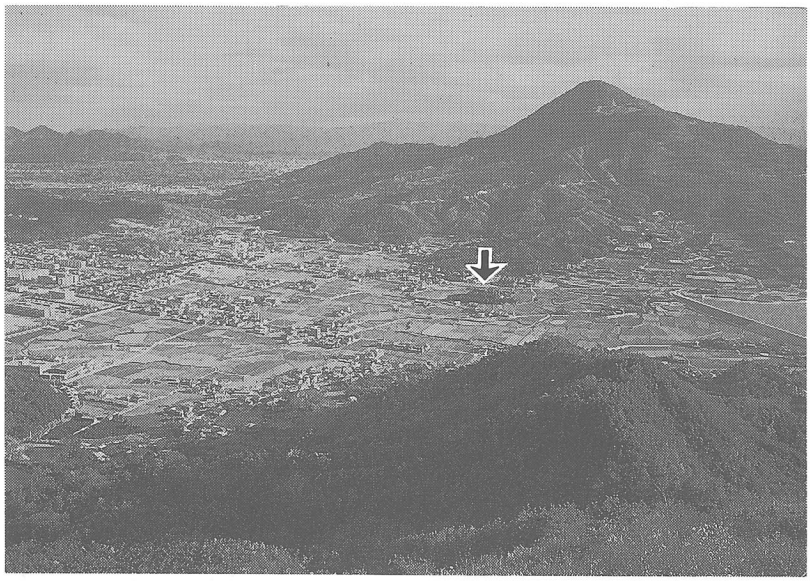
やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺（伝導寺跡）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、その際に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末頃佐伯氏に弘法大師（空海）が誕生したことによって、平安時代から室町時代にかけては門前町として栄え、鎌倉時代から室町時代初期にかけて寺院の最盛期を迎え、地名も寺名そのまま善通寺村となるが、戦国時代には殆どの寺院は

焼失してしまう。

寺社の復興は江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからであり、この頃四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

明治29年には第11師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道網が整備され、善通寺町として都市化が始まり、昭和29年３月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。



第13図
有岡古墳群全景
（北西から）

※矢印・王墓山古墳

参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年 7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年 3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年 3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年 3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年 3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年 3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年 3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年 3月
『稲木遺跡』	稲木遺跡発掘調査団	1989年 3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年 3月

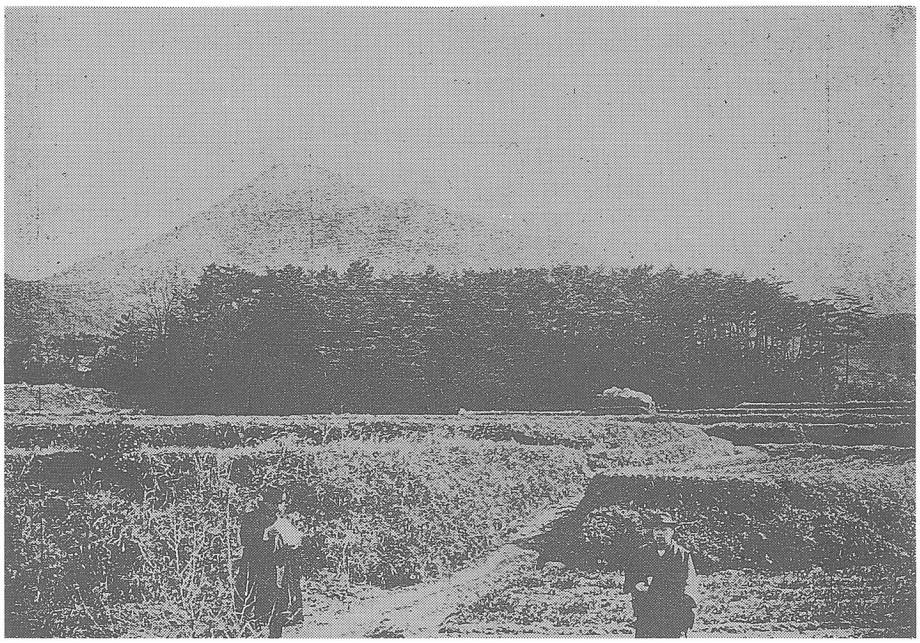
～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～

『中村・乾・上一坊遺跡』 第一冊	香川県教育委員会	1987年 3月
『矢ノ塚遺跡』 第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稲木廃寺』 第六冊	香川県教育委員会	1989年 3月
『永井遺跡』 第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章　主体部の発掘調査

①　調査に至る過程

王墓山古墳は、古来より墳墓として認識されており、その小丘全体は「おおはか」と呼ばれて来た。明治30年頃の古地図には「大墓山」と記載されているが、大正時代以降の地図では「王墓山」となっている。記録に残る最初の調査は大正時代に行われ、昭和８年に発行された「史蹟名勝天然記念物調査報告」に「王墓山古墳」として紹介されている。



第14図
王墓山古墳遠景・北から
（大正時代）
「史蹟名勝天然記念
物調査報告」から

第15図
王墓山古墳実測図
（大正時代）
「史蹟名勝天然記念
物調査報告」から

「史蹟名勝天然記念物調査報告」の記録によれば、この時には既に小丘の西側の谷を堰き止め、溜池を築くための土取りを目的に、本墳の北側斜面が大規模に削り取られ、この箇所は崖状の地形となっており、本墳前方部南東側も住宅建設の際に削られ、本来の地形はかなり改変されていたようである。

これまでの調査結果を総合すると、本墳に最初に開発の手が及んだのはこの頃のようで、墳丘周辺に円筒埴輪や葺石が散乱していたこと、後円部中央が盗掘により窪んでいたことが報告されている。また、本小丘周辺に陪塚とみられる小円墳が所在していたことも併せて報告されている。

「史蹟名勝天然記念物調査報告」に掲載された写真(第14図参照)を見ると、本丘陵は松の巨木に覆われているが、この頃は「至る所に巨石が露出しており、巨石の中には直立したものもあった」ことを、住宅が史跡に隣接する松浦修氏から伺った。

その後、昭和期後半には所有者が代り蜜柑畑として開墾される。これが二度目の開発であり、地表に露出していた巨石群もこの時に失われる。また、かつて周辺の水田中に所在したという7基の陪塚も姿を消す。(位置は故矢原高幸氏が克明な記録を残している。)

そして、昭和57年の発掘調査に至る。

② 緊急発掘調査の実施 ～「王墓山古墳発掘調査概報」1982.3から～

昭和57年3月11日付けで、四国開発商事株式会社から善通寺市教育委員会に対して、王墓山古墳の所在する小丘全体を対象とした宅地造成計画の届け出がなされた。

土地の所有者は一切の権限を四国開発商事株式会社に委任しており、香川県教育委員会と善通寺市教育委員会から数回の協議を重ね現状での保存を希望したが、計画の変更は困難ということで、発掘調査を実施し、その結果を待って再度協議することとなった。

第16図
王墓山古墳遠景・南から
(昭和57年)

そこで、善通寺市教育委員会では国庫補助を受けて、香川県教育委員会の指導のもとに昭和57年11月15日から昭和58年３月31日まで発掘調査を実施した。この調査により得られた資料はこれまで誰も想像すらし得なかったであろう驚くべきものばかりであり、その重要性が評価され、昭和59年11月29日には史跡に指定され、その後直ちに国庫補助事業により公有地化される。そして、昭和61年度から史跡の整備事業に着手するが、整備事業の一環として実施した「整備に伴う発掘調査及び記録作業」を次のとおり実施している。

昭和62年度　…　墳丘及び墳丘周辺部の遺構確認調査
昭和63年度　…　羨道部における排水溝の確認調査
平成元年度　…　横穴式石室解体作業に伴う遺構の観察と記録
平成２年度　…　墳丘復元工事に伴う遺構の観察と記録

以下、昭和57年度の調査結果に上記の調査によって得られた資料を加えて、本遺跡や出土遺物について紹介する。

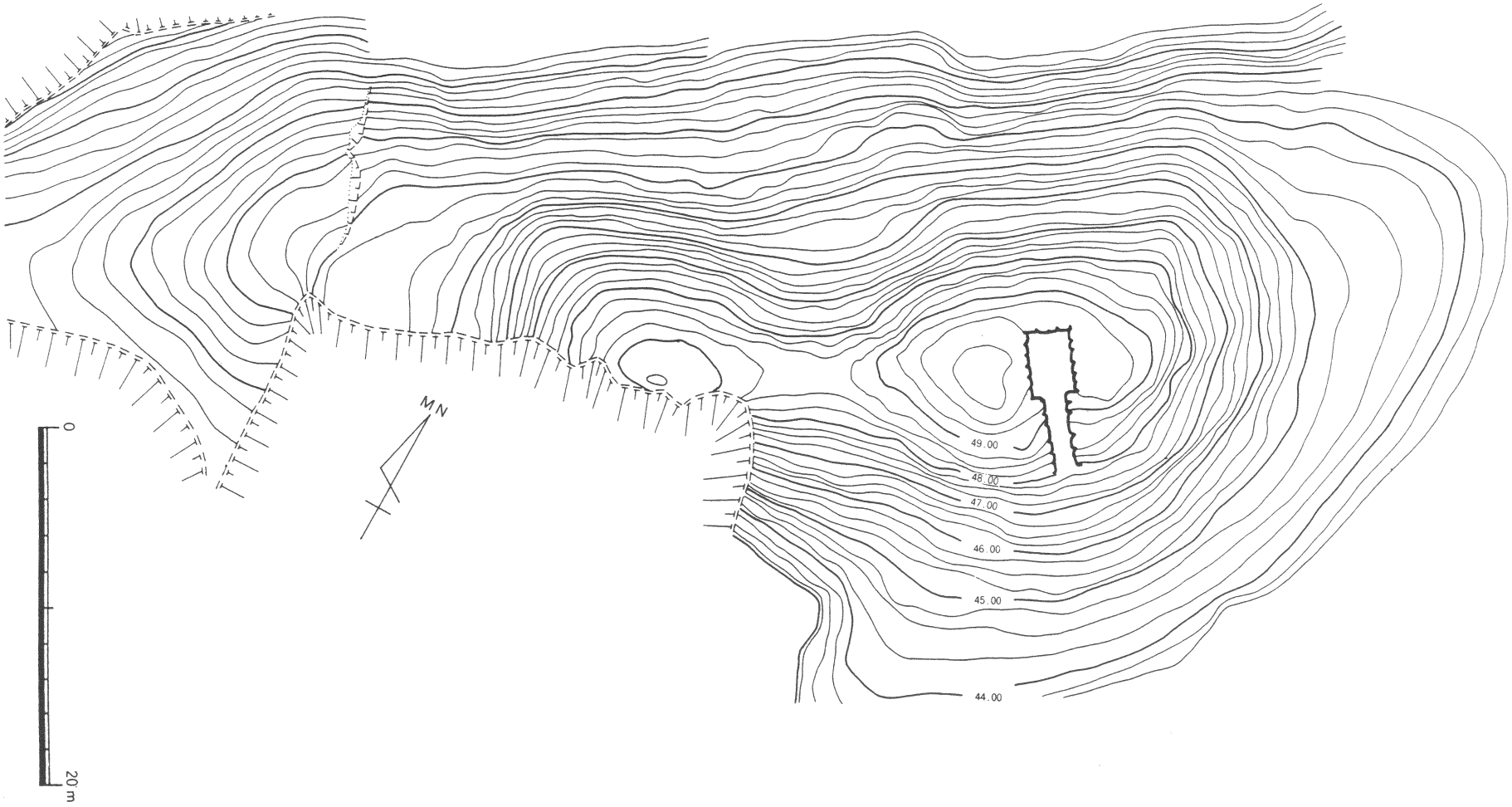
③　**横穴式石室と石屋形の発見**（昭和57年度の調査概報から）

大麻山の北西麓には、市街地から東西に併走する２本の県道（善通寺大野原線・善通寺観音寺線）に挟まれた狭長な微丘陵水田地帯が広がる。ここが有岡地区である。前章で述べたように、有岡地区には前期から後期に至る各時期の古墳が数多くあり、その要所には有力豪族の墳墓と見られる前方後円墳が点在している。

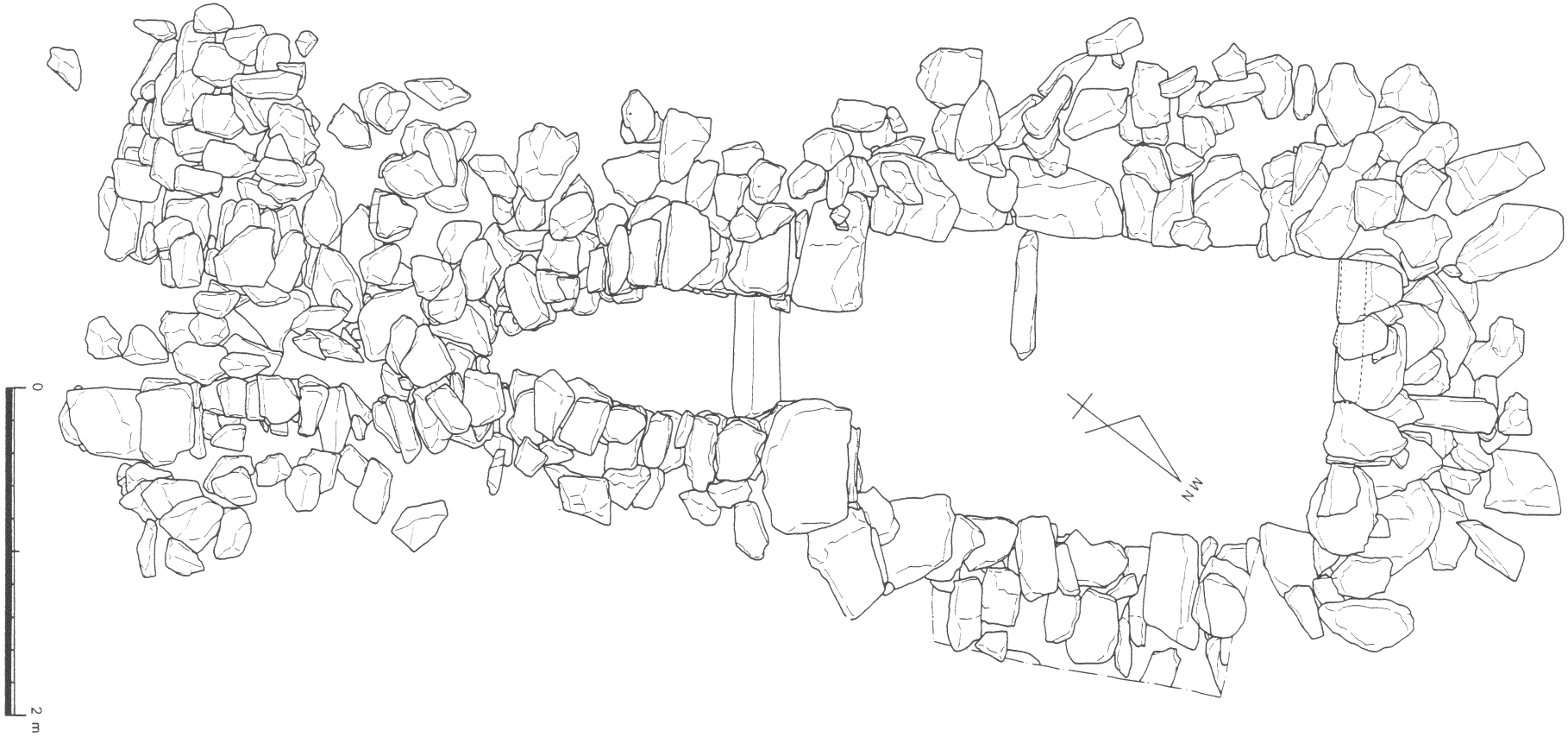
王墓山古墳は、この有岡地区の中央部に所在する独立した小丘上に構築されており、周辺の古墳地帯から現市街地周辺に遺存する集落跡を経て、平野部全域から瀬戸内海まで一望にできるというその名にふさわしい立地条件を満たしており、実際の規模よりひときわ大きく見え、また遠方からも容易に識別できる。

昭和57年11月15日から実施された緊急発掘調査は主体部を中心に行われたため、墳丘の調査は後円部の墳頂部を中心に、北側・南側・東側の三方向に幅１ｍ程度の試掘区を設定し、墳丘の断面観察が行われた程度である。また、前方部の南側が大きく削り取られていたことから、この際の調査では、墳丘の規模や方位を明らかにすることは出来ていない。

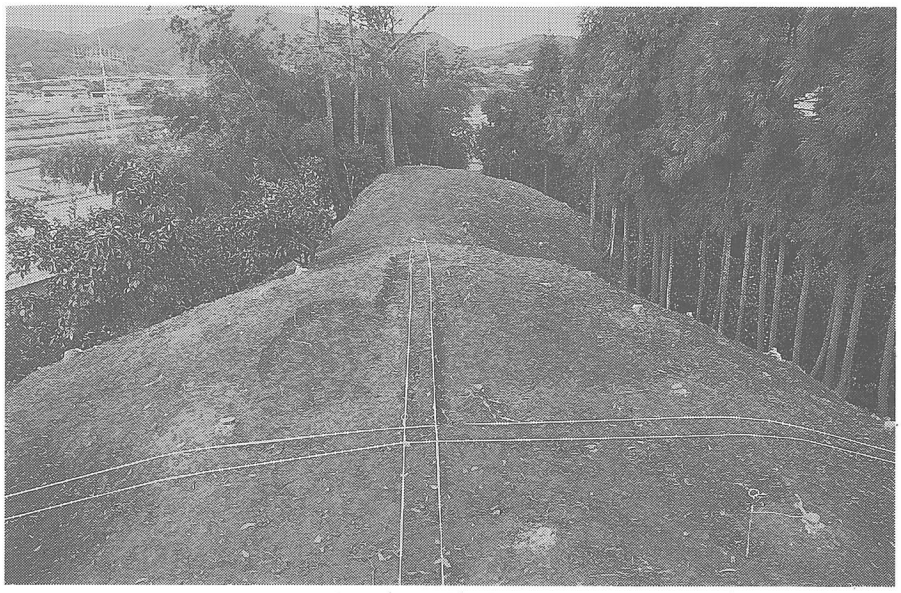
本墳が前方後円墳であることは外観により容易に判別できたが、伐採作業とともに実施された地形測量作業により、両くびれ部・前方部のコーナー部分・墳裾部などが更に明確にされた。また、竪穴式石室の存在が予想されていた後円部の墳頂部は大きく窪んでおり、かねてから盗掘の噂もあったことから調査の成果は余り期待されていなかった。しかしながら掘削調査を開始したところ、以外にも横穴式石室が検出された。



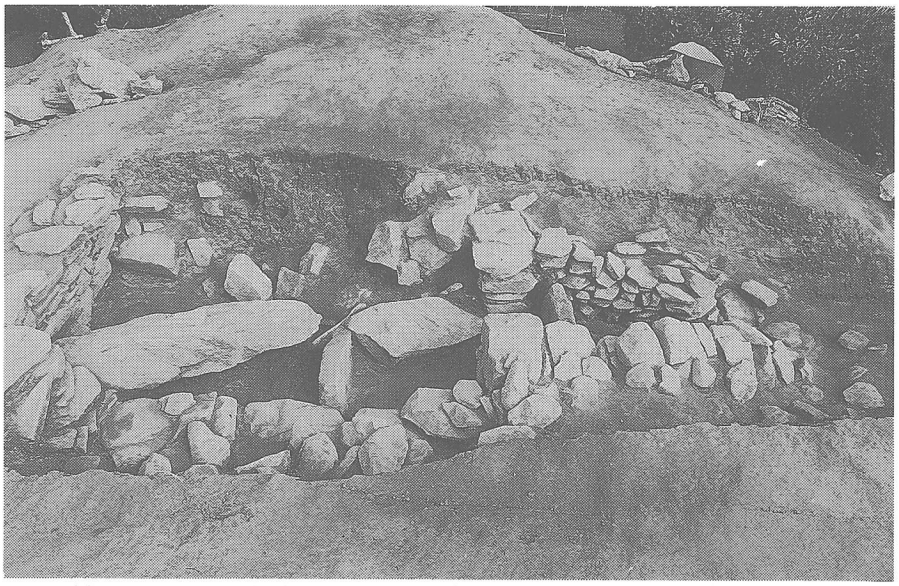
第17図　王墓山古墳墳丘実測図（昭和57年度「調査概報」から）



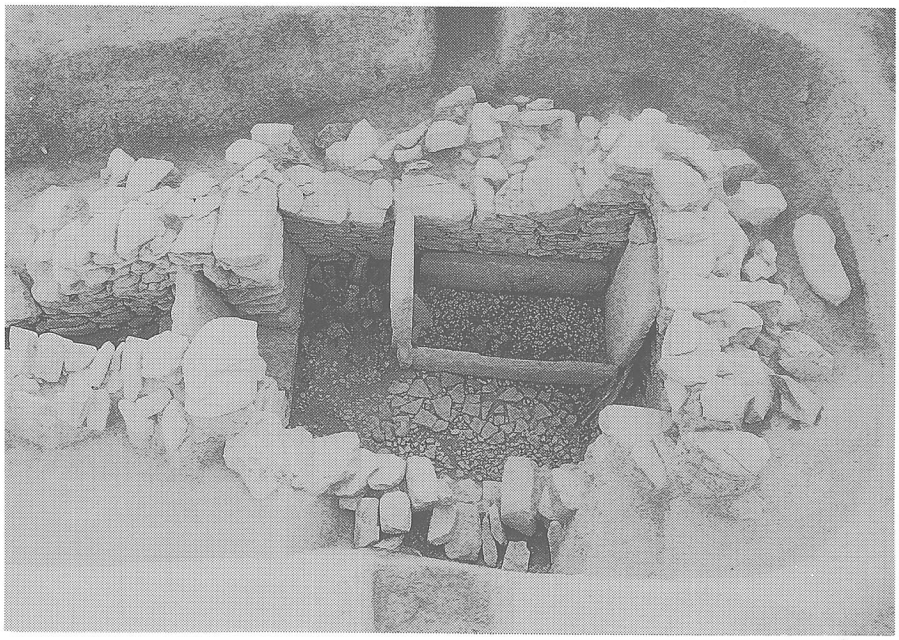
第18図　横穴式石室上面検出状況実測図（昭和57年度「調査概報」から）



第19図
発掘調査前の墳丘
（後円部から前方部を望む）



第20図
横穴式石室の上面検出状況
（西から）



第21図
横穴式石室完掘状況
（東から）

横穴式石室は玄室部・羨道部ともに天井石が全て失われていた。周辺部を探索したところ、開口部の南側斜面下方約20mの位置に羨道部の天井石と思われる巨石が1点、玄室内部（上層）に転落した巨石が1点確認されただけで他には見当らない。

本墳南東側に造られた「ぜんも池（旧：大墓池）」の築堤工事の際に、本丘陵の北側斜面が削り取られたらしいが、その際に転用されたようである。

多くの横穴式石室がそうであるように開口部の崩壊は比較的早く、本墳でも天井石の転落に伴い、押さえを失った羨道部南側は両壁が内側にひどく崩れ落ちているが、他の部分のくずれは小さい。また転落した壁材の数は、実際使用されていたと予想される石材数より少なく、ぜんも池の北西側堤を兼る本丘陵南東側裾部に石室を構成する石材と同じ安山岩が多数使用されていることからも、天井石が完全に失われたのは本県に数多くの溜池が造られた近世のことではないかと考える。

調査の進展に伴い、玄室内部から板状に加工された角礫凝灰岩の立石が姿を表した。瀬戸内一帯でも希な石屋形、四国で初めての発見であった。

④　石室の構造

横穴式石室を埋葬主体にもつ前方後円墳は県下では本墳が初めてである。石室は後円墳丘中央部に構築されており、墳丘主軸線にほぼ直交する方位に主軸を持ち南東に開口している。

構造は、短形の玄室中央部に狭長な羨道の続く両袖型横穴式石室である。壁石には、一部花崗岩の混入をみる他は全て安山岩を使用している。安山岩は本墳を囲む大麻山や五岳山などに多量に産する。

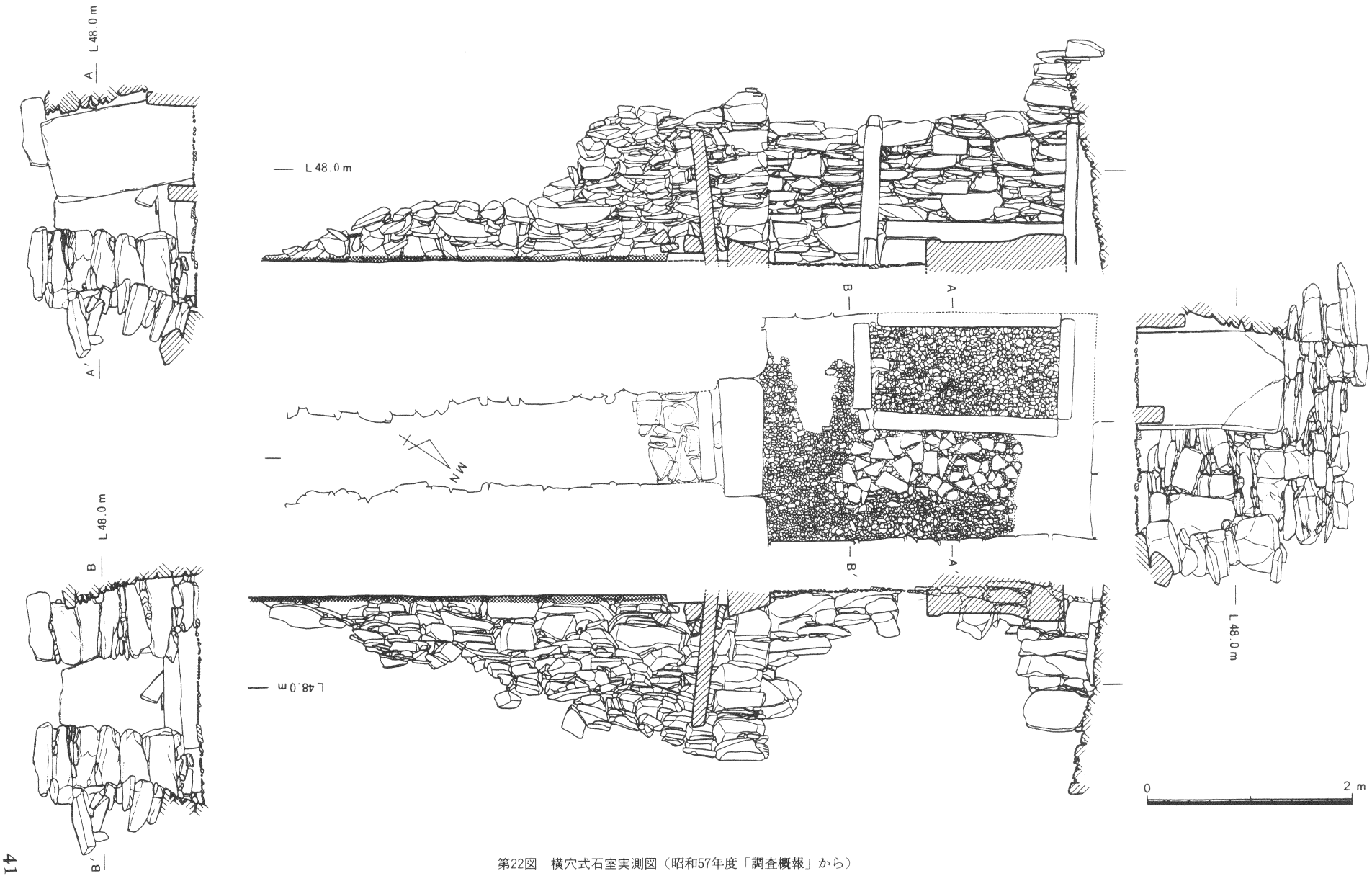
玄室壁は、扁平な小形安山岩割石を用い、木口面を内に向けて十数段積み重ねている。上段へ行くに従って、持ち送り気味に内傾している。当地区周辺部の後期の横穴式石室は、同様の石材でも巨大なものが使用されており、壁面は平均3～4段積みであるが、本墳のそれには竪穴式石室の面影が残り、竪穴構造から横穴構造への移行期の形態を示す珍しいものである。県下では類例は報告されていない。

袖石には比較的大きな扁平安山岩を使用しているものの、やはり数段積み重ねている。羨道壁の大半は、丸味を帯びた安山岩が占める。玄門部には、石屋形の石材と同一の丁寧に整形された角礫凝灰岩の一枚岩が閉塞扉として立てられており、その下部はブロック状の安山岩塊で押さえられており、閉塞後にここから侵入した者はいないが、玄室東側壁は上部からの盗掘により最下段まで失われていた。

玄室床面は、平らに整形された地山（乳灰褐色の軟質岩盤）の上に安山岩扁平小割石を多く含む灰黄青色粘土を薄く敷き、更に花崗岩小礫を含む明褐色土を置き、表面に和泉砂岩を中心とした円礫を隙間なく敷き詰めている。

後の項で紹介するが、円礫を敷き詰めた床面上には、金銅製装身具及び馬具類を始め、県内では珍しい豪華優美な副葬遺物がほぼ全面に満たされていた。

ところで、玄室内部施設として、県下では勿論初めてであり瀬戸内一帯でも数少



第22図　横穴式石室実測図（昭和57年度「調査概報」から）

第23図
石屋形と転落した石屋形の
天井石　　（西上方から）

第24図
転落した石屋形天井石上の
遺物出土状況　（南から）

第25図
石屋形内部の遺物出土状況
（西上方から）

ない「石屋形」が検出された。「石屋形」は九州、なかでも肥後地方に濃密な分布を示すが、本墳でも検出されたことから、何らかの伝播経路及び文化的交流を考慮しておかなければならないであろう。

石屋形は奥側腰石（西側：高さ0.5m・横1.8m）が石室西側壁と接し、石室奥壁と接する短側腰石（北側：高さ1.4m・横0.9m）と、その南側約２mの位置に設置された短側腰石（南側：高さ1.4m・横0.8m）を設け、この２枚の板石で天井石を支えている。また、前側腰石（東側：高さ0.3m・横1.8m）の上面中央部は幅広U字形に浅く削り込み装飾されている。

石屋形や閉塞石の材料は淡灰褐色を呈する角礫凝灰岩である。５㎜以下の角礫で構成されており、その堆積面に沿って褐色の縞模様が不規則な間隔を持って認められるが、その場所により堆積する礫の大きさが異なり、特定の面で容易に剝離する性質を持っているため、板状の石材を容易に切り出すことができる。従って、本石室に使用されている板材は厚さが15㎝前後に揃っているが、巧く剝ぎ取れなかった部分は鉄斧により加工しており、随所に顕著な加工痕を残す。

また、石屋形には１枚の板石による天井石が架構されていたが、重量のある板石を両側２点（間隔180㎝）の腰石で支えてあったため、比較的早い時期に何等かの衝撃によって折れ、石屋形内に転落していた。

石屋形東側の礫床面直接上には、石屋形と同一の角礫凝灰岩を割り敷いて棺台とした痕跡が確認されたが、後述するように副葬須恵器に時期差が見られることや副葬品が二次的に動かされた状態で検出されたことなどから、追葬時のものであると判断した。従って、閉塞石は二度閉ざされたことになる。

棺台に使用された角礫凝灰岩は丁寧に造られたものではなく、荒く打ち欠いた物が使用されており、付近にあった石材を俄に使用したようではあるが、閉塞石や石屋形にそれらしい損傷は認められず、またその厚さも全て７㎝以下と他の板材に比べて薄い。既に失われていた開口部の構造等と併せての検討課題であり、今後この石材の接合を試みる必要もあると考える。

⑤　副葬品の出土状況

石室内から出土した副葬品は種類・数量ともに豊富で、質的に見ても豪華である。金銅製冠帽を始めとして、青銅製品や金銅（鉄地金銅張り）製品が多く含まれる馬具類は一際目立っている。そして、保存処理の過程のX線写真撮影により銀象嵌による装飾の存在が明らかになった鉄刀・銀製鍔付き鉄刀をはじめとする鉄製武器（具）類、他に椀貸伝説を彷彿とさせる程の膨大な量の須恵器、金銀製耳環や宝石装身具など、また副葬された遺物とは区別される、祭祀に伴うと考えられる遺物群が玄室床面を埋め尽くしていた。

副葬品の種類とその置かれている位置は極めて特徴的である。

須恵器は玄室南西の石屋形と西側袖部の間に集中して置かれており、平瓶を除い

たほぼ全ての器形が認められた。優美な透かし付き大型器台を始め、脚台付き子持ち壺、提瓶、横瓶、甕、壺、甕、坏など様々な種類の器が雑然と重なり合うさまは圧巻である。また、状況から判断して二次的に移動されたことは疑いなく、恐らくは追葬の際の所産ではないかと推測される。

また、玄門部閉塞扉石前に三組の坏が置かれていたが、開口部の状況が復元されず、葬送に伴い置かれたものか、葬送後の墓前祭祀等に伴い置かれたものであるのかは不明であり、この遺物の意味の解明も今後の課題である。

馬具及び鉄製品は玄室北東側隅部分に山積みに置かれていた。その上部には馬鈴や金銅製の馬具が目立ち、その下には多量の挂甲の小札や鉄鏃などが密集していたが、錆により大半のものは癒着し塊となっていた。その塊の中からは、後の保存処理の過程で弓の金具や胡籙も確認されている。

石屋形部分の遺物については天井石上に副葬されていたものと、石屋形内部に副葬されていたものがあったようであるが、前述したように、天井石は石室構築後、比較的早い時期に何等かの要因（石室石材落下等）により崩壊し、屋形内に落下している。そのため遺物の出土状況に不自然な点が多いが、石屋形天井石の崩落状況を観察すればそれぞれの遺物の副葬位置の概要が明らかに出来る。(第26･27図参照)

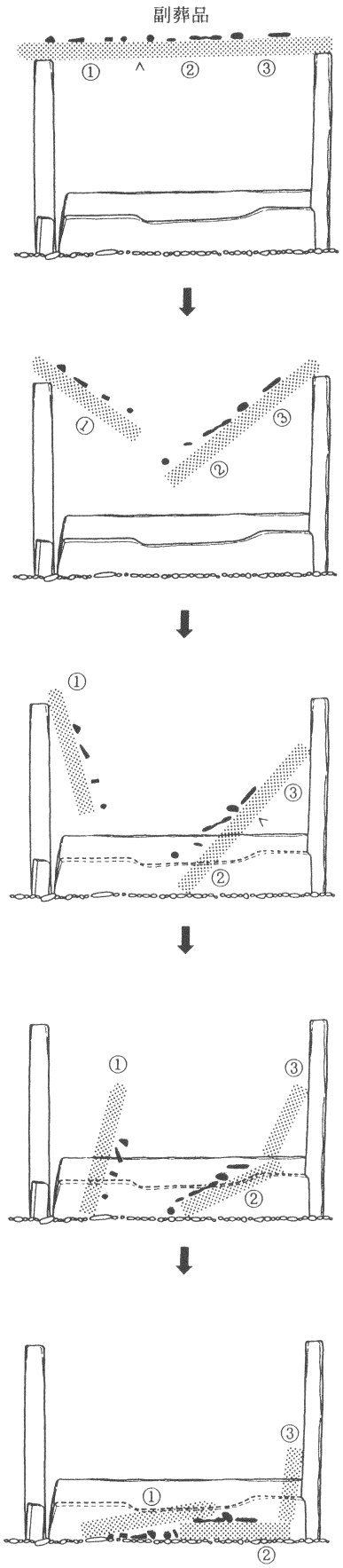
『３枚に割れた天井石（南から①・②・③とする）のうち、まず①と②＋③の間が割れ、両側の腰石を支点に石屋形内に落下を始める。天井石の長さは石屋形の全長より20㎝程長いが、北側腰石は上端が玄室奥壁と接しているため②＋③の架かりは浅く、その分①（南側）の架かりが深くなっている。

架かりの浅い②＋③は①よりも先に架かりを失い、石材全体が石屋形内に落下する。そして着地した衝撃でほぼ中央部で②と③に割れ、②は礫床面上に倒れ、この上に③が立った状態で落下する。

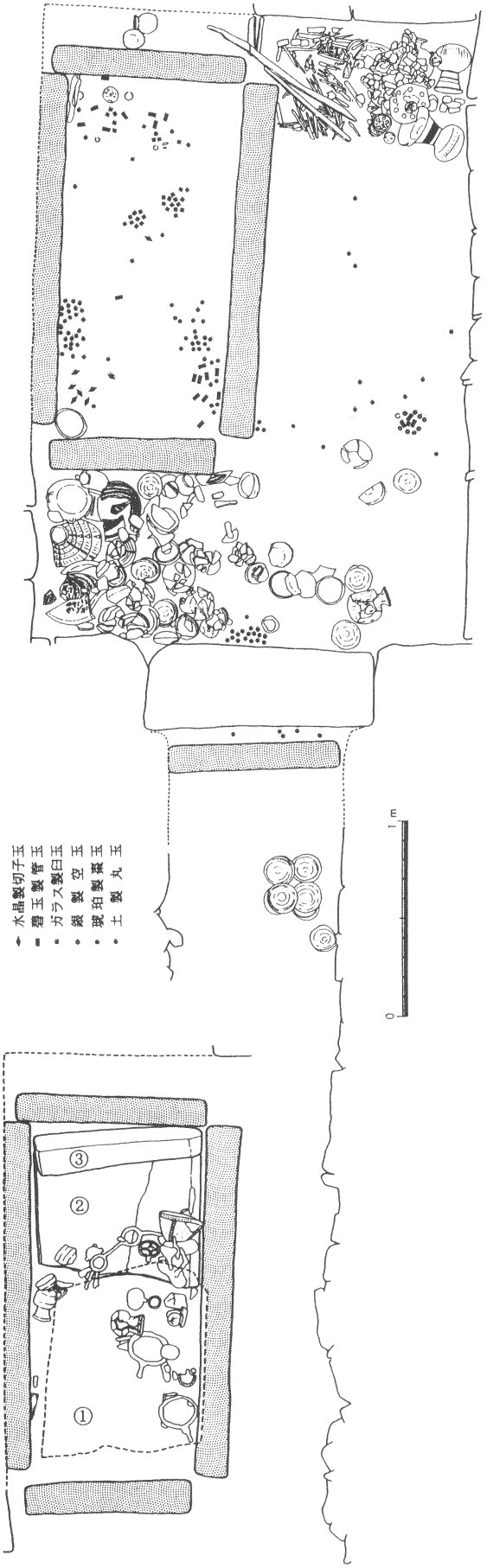
一方南側の①はかなり回転してから架かりを失い南側腰石に添ってほぼ垂直に落下するが、落下時の回転の慣性により着地後北側に倒れる。そして一部が前側腰石に乗った状態で②の上に重なっている。』（第23図参照）

石屋形内に転落した②の上からは金銅製冠帽や多数の馬具（鉄地金銅張鏡板付轡・楕円形杏葉等）や須恵器（高坏、壺等）が出土しているが、②と③の下からは小型の装飾品（金環・銀環・水晶製切子玉・碧玉製管玉等）しか出土していない。しかし①の下からは、玉等の小型の装飾品と伴に多数の馬具（鉄製輪鐙・楕円形杏葉）、須恵器（甕）等の遺物が出土している。この状況を見れば、小型装飾品と石屋形の南西隅部の土師器以外は、全て石屋形の天井石上に置かれていたものである可能性が高いと考えられるが、いずれにせよ本来の副葬位置が保たれていないことはまことに残念である。

部分的な盗掘を受けてはいたものの、一石室内にこれだけの工芸品が副葬されることに驚きを覚える。また、副葬品が認められない空間についても、既に風化してしまったであろう繊維製品や皮革製品等があった可能性を考えなくてはならない。



第26図　石屋形天井石崩落の状況



第27図　横穴式石室内の遺物出土状況実測図（昭和57年度「調査概報」から）

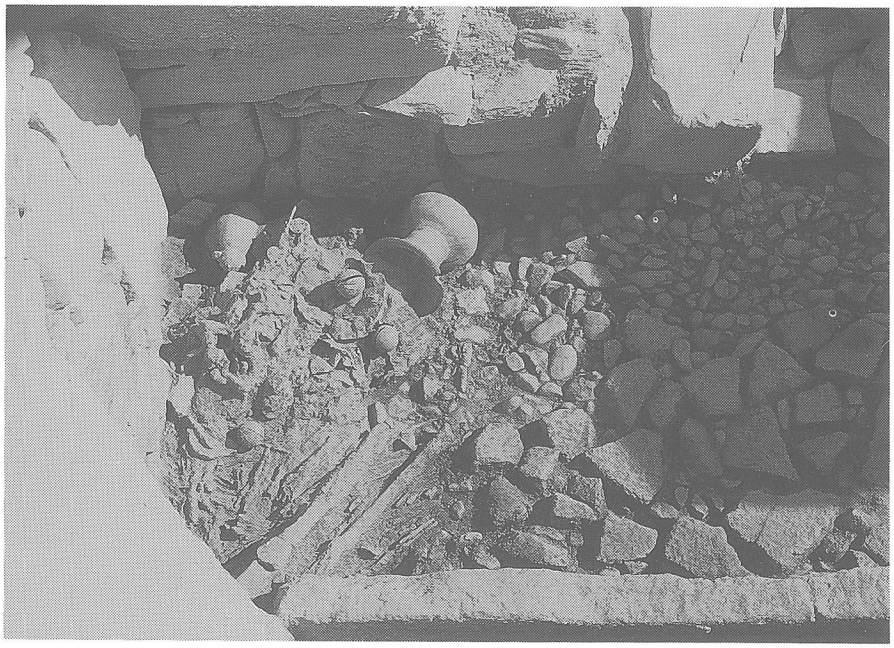
⑥　出土遺物について

多量に出土した須恵器については、本報告書に掲載した遺物以外にも多くの破片が残されており、横穴式石室内に追葬が行われ数多くの遺物が動かされていることや盗掘の痕跡が認められることなどから、更に慎重な分析が必要と思われる。

また、馬具・武具（器）・装身具等については大半が金属製品である。中には貴重な遺物も多く含まれていたために迅速な保存処理が望まれたが、昭和57年度の調査当時、県下にはこのような遺物を保存処理できる施設が無く、金銅製品については遺物の保存を第一に考え、概報用の写真資料を得た後、直ちに奈良国立文化財研究所に送り保存処理をお願いした。残りの鉄製品等に関しても、金銅製品の保存処理を終えた後に再度同研究所のご協力を頂き、本整備報告書刊行までに殆どの作業を終えることができたが、本格的な整理作業や分析はこれからである。従って今後も引き続き作業を行い、改めて埋蔵文化財としての調査報告書の刊行を計画しているので期待して頂きたい。

また、平成元年度に実施された横穴式石室解体復元作業時に行った礫床の剝ぎ取り作業によって、礫床下に転落していた玉類が多数検出されており、概報に掲載された出土点数よりかなり増えている。しかも、昭和57年度の発掘調査時に玄室から搬出された多量の土が善通寺市立資料館に保管されており、現在も中に含まれる小玉等の微細な遺物の検出に努めているが未だ完了していない。従って、右頁の遺物一覧表には平成４年３月末現在の数字を掲載してある。

以下、遺物の種類別にその内容を解説する。



第28図　玄室北東隅部の遺物出土状況（西から）

第29図　王墓山古墳出土遺物一覧

種類	(解説番号)	名称	点数
須恵器	(1)	坏身	45
	(2)	坏蓋	43
	(3)	高坏	7
	(4)	蓋付き短頸壺	3
	(5)	甕	2
	(6)	𤮈	3
	(7)	壺	1
	(8)	長頸壺	2
	(9)	横瓶	2
	(10)	提瓶	3
	(11)	器台	3
	(12)	脚付き子持ち壺	2
	(13)	装飾付き器台	破片
		その他	破片多数
土師器	(14)	壺	3
馬具	(15)	鉄地金銅張f字形鏡板付轡	1組
		鉄地金銅張f字形鏡板付轡	破片
	(16)	素環鏡板付き轡	1組
		素環鏡板付き轡	破片
	(17)	青銅製鈴付鉄地金銅張雲珠	1
	(18)	青銅製馬鈴	3
	(19)	鉄地金銅張雲珠	3
	(20)	鉄地金銅張剣菱形杏葉	3
	(21)	鉄地金銅張楕円形杏葉	3
	(22)	鉄製輪鐙	2
	(23)	辻金具	1
	(24)	雲珠	21
	(25)	鉸具	5
		馬具片	多数

種類	(解説番号)	名称	点数
武具(武器)	(26)	挂甲	1
		(小札)	(約200)
	(27)	銀装鍔付き鉄刀	1
	(28)	銀象嵌入り鉄刀	1
	(29)	鉄刀	3
	(30)	鉄鏃	50
	(31)	弓金具	5
	(32)	胡籙	1
	(33)	鉄槍	1
装身具	(34)	金銅製冠帽	1
	(35)	金環	1組
	(36)	銀環	4組
	(37)	銀製空玉(球形)	1
		〃(有段紡錘形)	15
	(38)	水晶製切小玉	9
	(39)	碧玉製管玉	23
	(40)	琥珀製棗玉	3
	(41)	翡翠製勾玉	1
	(42)	ガラス製臼玉	73
	(43)	ガラス製小玉	4
	(44)	石製小玉	1
	(45)	滑石製小玉	1
	(46)	滑石製有孔円盤	17
	(47)	土玉	約300
工具	(48)	鉄斧	1
	(49)	砥石	1
埴輪	(50)	円筒埴輪片	多数
	(51)	形象埴輪片	多数

(注)1．表中は平成4年3月31日現在までに明らかな点数を記したが、装身具の玉類のような小型遺物については、現在も石室中から運び出された埋土のふるいがけ作業が行われており、多少数量が増えることが予想される。

2．土器・馬具・武具(器)類はいずれも保存処理を終えたばかりである。表中には復元数値を記したが、接合出来ていない破片が多数含まれているので、再度整理・分析作業を行った後に改めて報告したい。

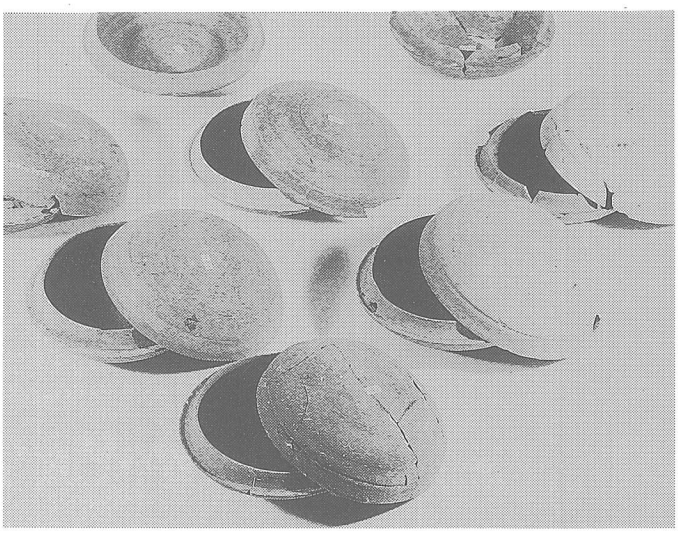
第30図　玄室南西隅部の須恵器出土状況（東から）

Ⅰ．須恵器

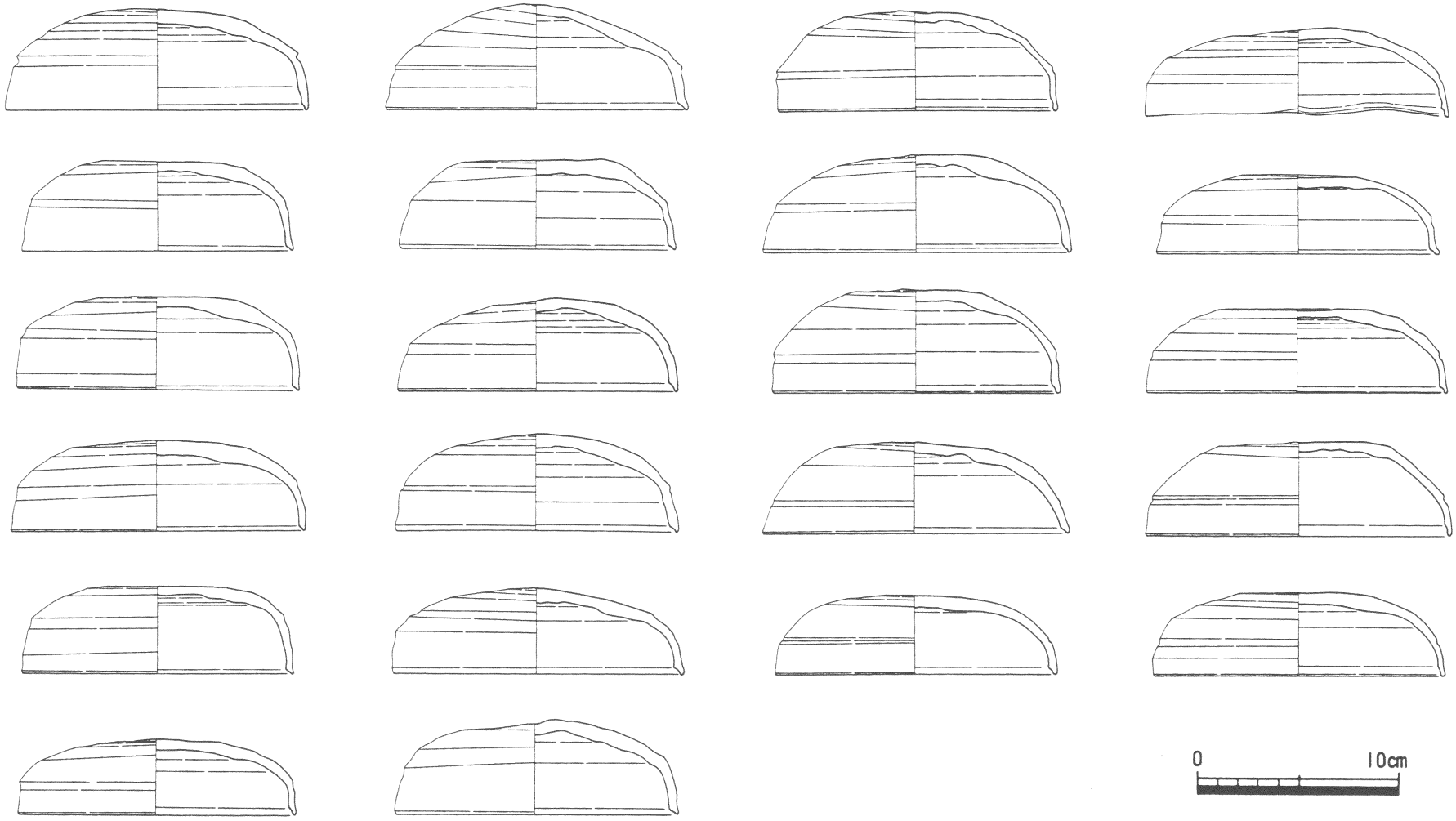
(1) 坏身・(2) 坏蓋

坏は羨道の玄門部前に置かれていた4組の坏身・坏蓋以外は全て玄室から出土したものであり、まだ少量の破片が残るが、整理作業により接合が完了したもので坏身が45点と坏蓋が43点ある。また追葬の際に二次的に移動されたようであり、本来の副葬位置等は不明であるが、その大半は玄室南西隅の須恵器集中部から出土し、一部はその東側床面にも散乱していた。

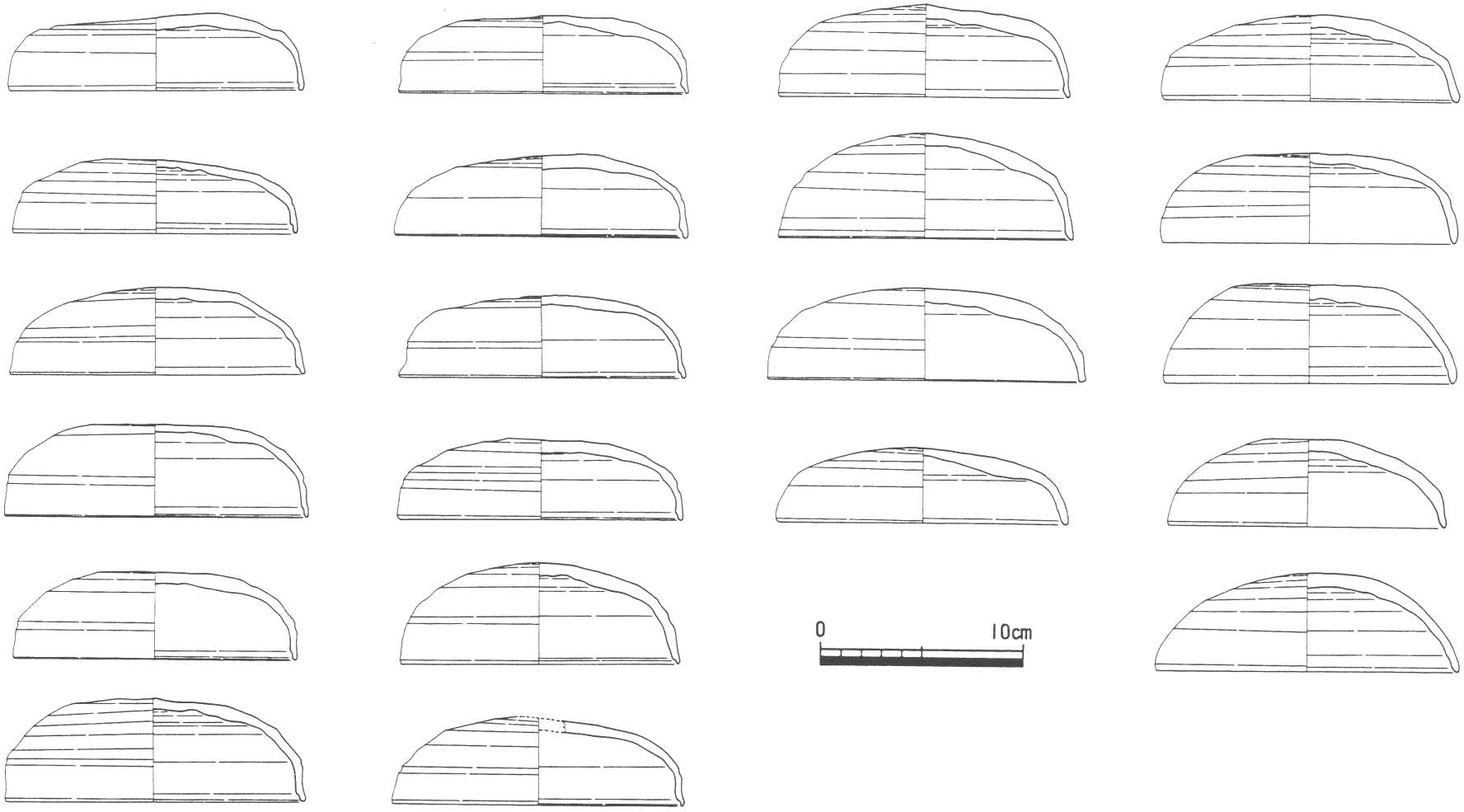
これらの遺物を観察したところ、時期差があることは明瞭であり、大きく二つのグループに大別できる。古グループ…①は6世紀中葉頃（6世紀前半の終り頃）、新グループ…②は6世紀後半頃の特徴を呈しており、初葬と追葬の時期差を示していると見て間違いないものと考えられる。新グループのものは更に二つのグループに分類することも可能であり、閉塞石により玄室と隔てられた羨道に並べて置かれていた4組の坏身・坏蓋がその更に新しい特徴を示すグループ…③に含まれることは、墓前祭祀等の存在を匂わせるが、②と同一時期として捉えることも出来る。



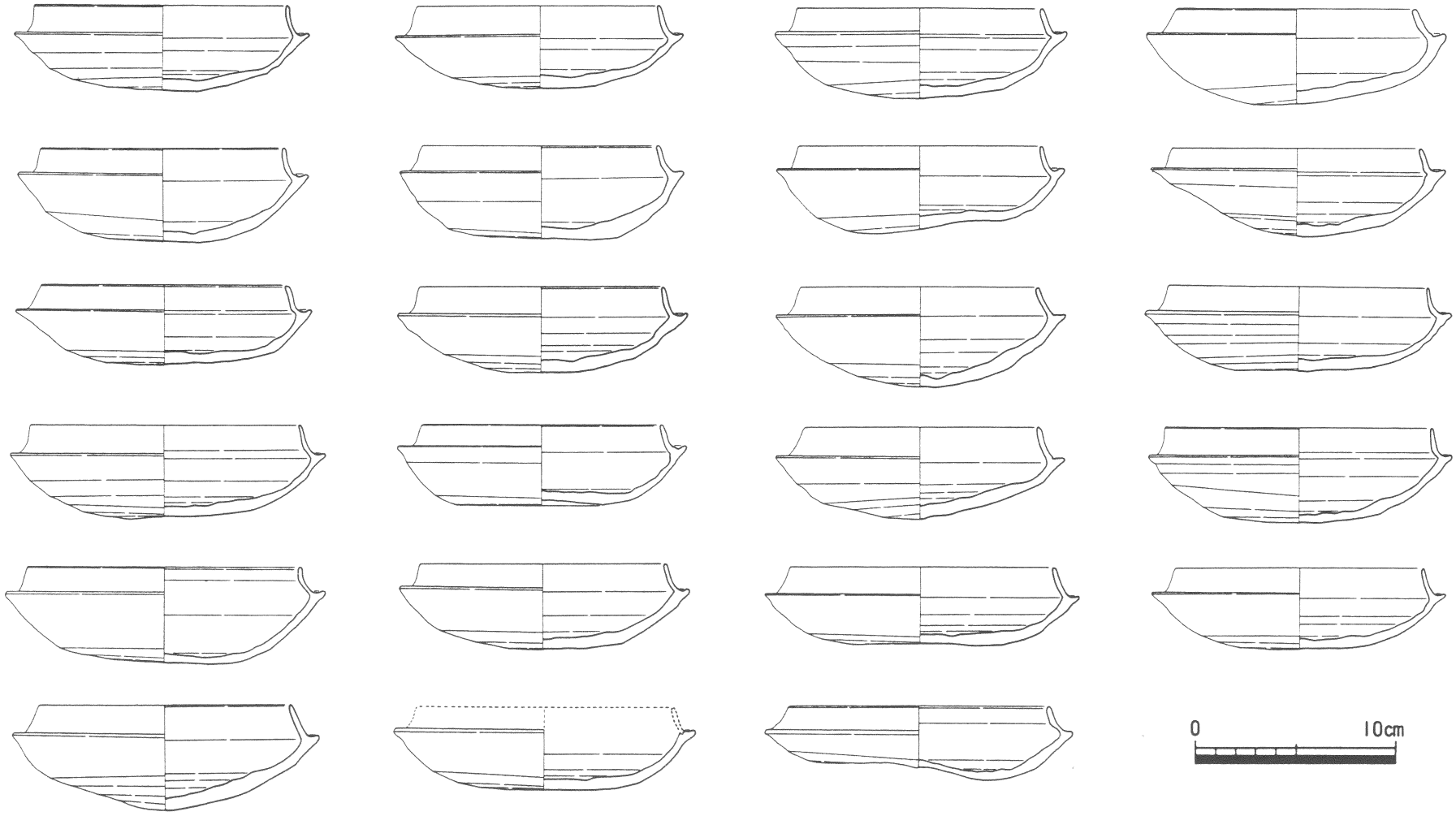
第31図　須恵器（坏身・坏蓋）



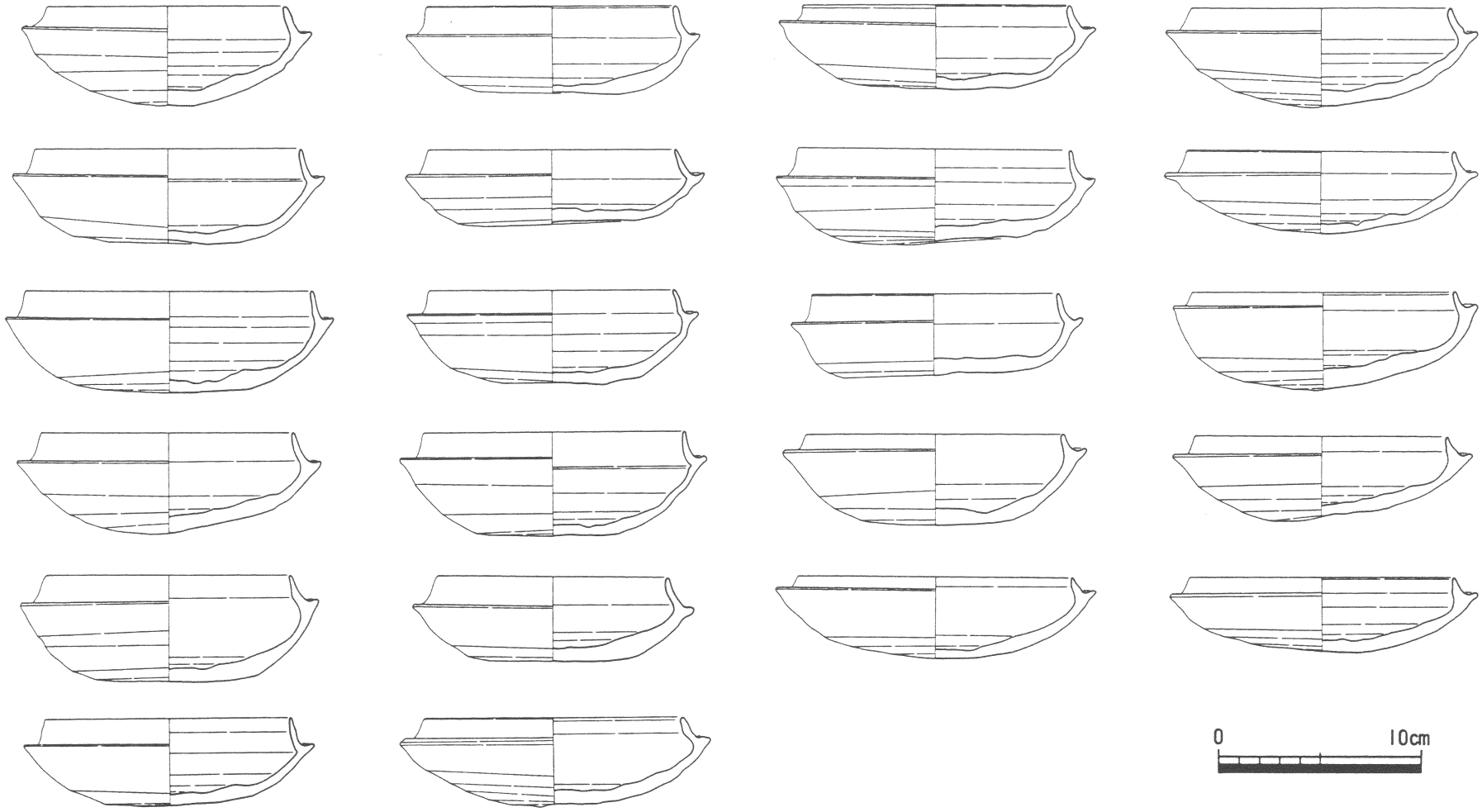
第32図　須恵器（坏蓋）実測図①



第33図　須恵器（坏蓋）実測図②



第34図　須恵器（坏身）実測図③

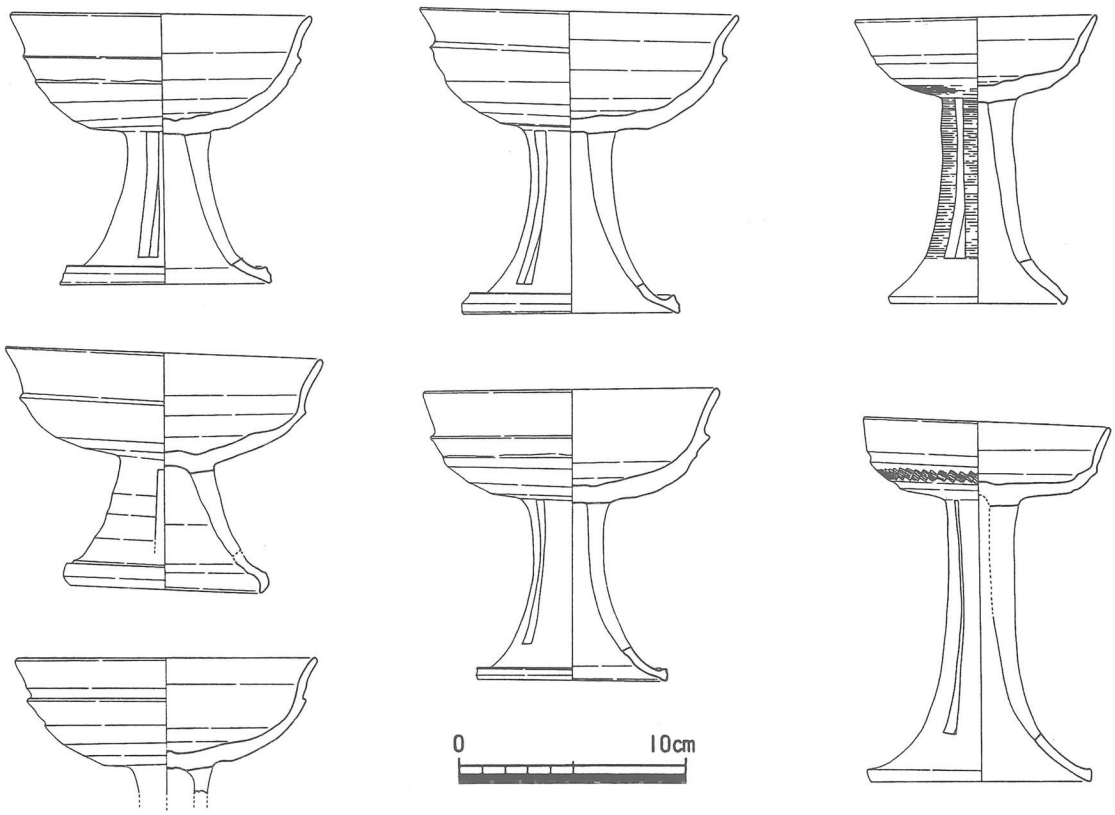


第35図　須恵器（坏身）実測図④

(3)　無蓋高坏

無蓋のものばかり７点出土しており、いずれも脚部に三方向に一段の透かしを持つ。脚部が短い古グループと長い新グループに分けられ、前者は口縁部が曲線的に外反するが、後者のそれは直線的であり前者程開かない。石屋形内から長脚のものが１点、他は玄室南西隅の須恵器集中部から出土している。

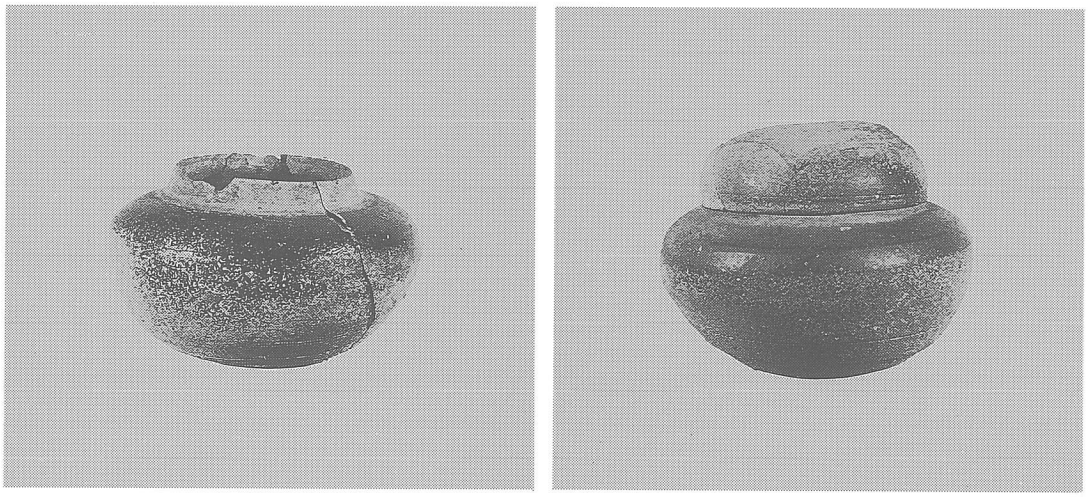
第36図 須恵器(無蓋高坏)



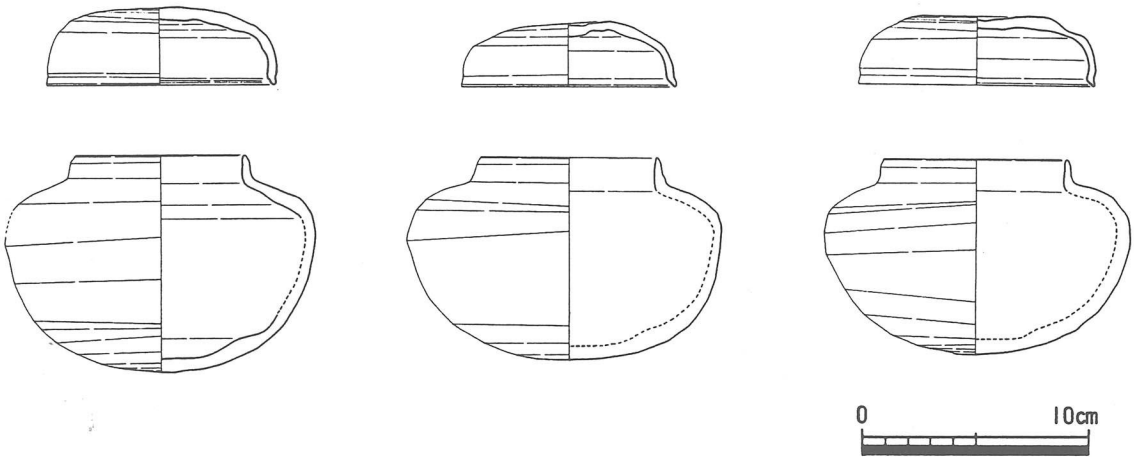
第37図　須恵器（無蓋高坏）実測図

(4)　蓋付き短頸壺

口頸部が緩く内彎して直立する直口壺で丸底であるが安定している。肩部から底部にかけて回天ヘラ削り調整により丁寧に仕上げられ、焼成も極めて良好である。壺は3点出土しており、それぞれに口縁部が垂直に降り端部でやや外反し、端部内面に段を持つ蓋とセットになっている。3点共に玄室南西隅の須恵器集中部から出土している。



第38図　須恵器（有蓋短頸壺）



第39図　須恵器（有蓋短頸壺）実測図

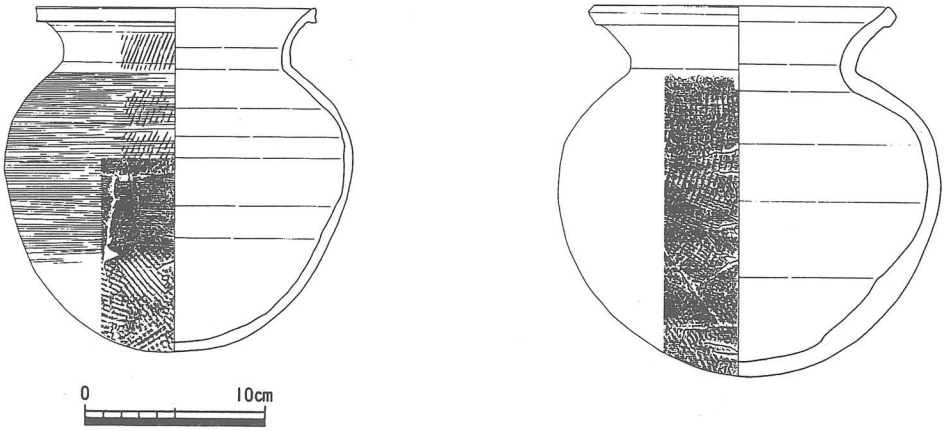
(5)　甕

比較的小型の甕が2点出土している。いずれも焼成は良好であり、一見したところ全体的な形態は類似しているが、口縁端部の特徴等に時期差が認められる。(A)は口縁端部が外側に肥厚し三角形の断面を呈しており、外面は格子叩きの後に底部を残して叩き跡を横方向にナデ消し、内面は同心円叩きによる調整が行われているのに対し、(B)は口縁端部が外側に肥厚し方形の断面を呈しており、外面は格子叩き、内面は同心円叩きにより器面調整が行われている。前者が先行するものと考え

られる。いずれも玄室南西隅の須恵器集中部から出土している。

（A）　（B）

第40図　須恵器（甕）

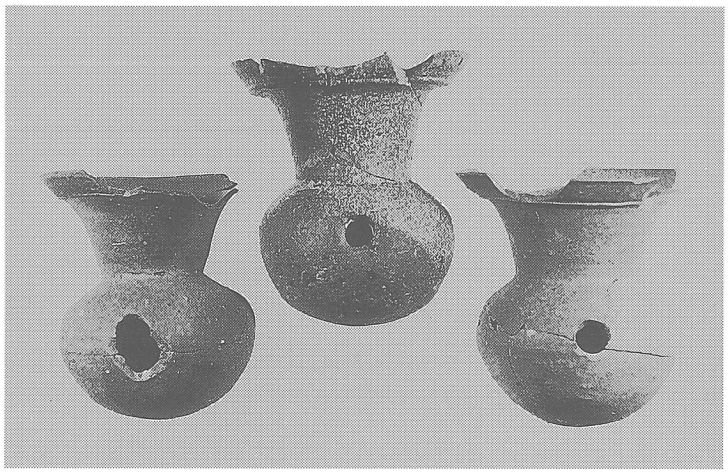


（A）　（B）

第41図　須恵器（甕）実測図

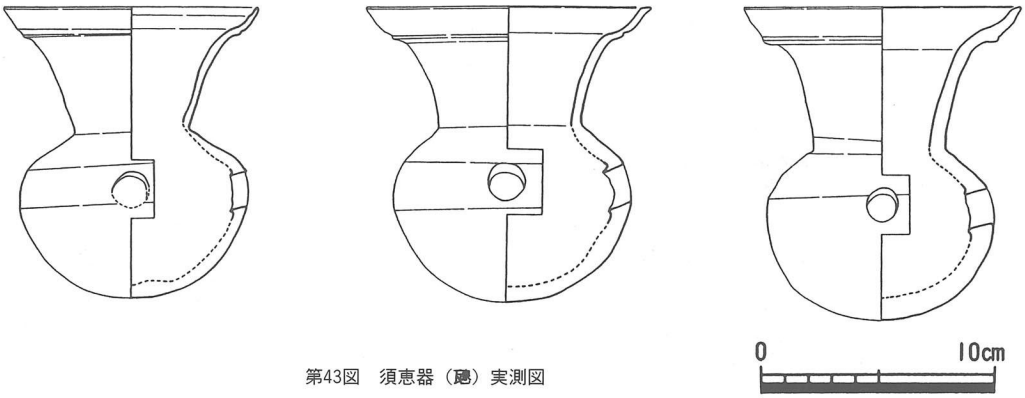
(6)　鴟

口頸部は外反気味に立上り、口縁付近で外上方に屈曲し明瞭な段を呈する。口頸基部は太く体部中央やや上位に円孔が上方から穿たれている。同様のものが3点出土しており、器壁の厚さに若干の違いが認められるが、同



第42図　須恵器（鴟）

一時期の所産と見られる。須恵器集中部から２点、石屋形内から１点出土しているが、後者は出土状況等から、天井石上に副葬されていたものと考えられる。

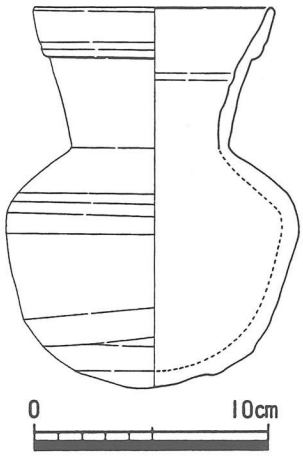


第43図　須恵器（甕）実測図

(7)　壺

体部の高さとほぼ同一の最大径を上方に持ち、口頸部から口縁部までは直線的に延び、口頸基部は太い。底部は回天ヘラ削り調整により丁寧に仕上げられており、口縁部には明瞭な段を有し、この段の下方に一条の沈線が廻る。石屋形の天井石上に副葬された状態で出土している。

第44図　須恵器（壺）



第45図　須恵器（壺）実測図

(8)　大型長頸広口壺

玄室北東隅部の馬具・武具が集中する場所から２点出土している。いずれの体部も底面が丸く尖りほぼ同一の形態を呈し、口頸基部径及び口縁部径もほぼ同一であるが、緩やかに外反しながら口縁部に至る口頸部の長さが異なる。

長頸のもの(A)は全体的に肉厚で、頸部では上下二条の沈線の間に櫛描波状文による装飾が施され、外反する口縁端部は丸く整えられている。体部の器面調整は上方が回転掻き目、下方が平行叩きで調整され、口縁部より底部にかけて濃深緑色の